

## 地域と学校の文化・スポーツ活動

### 文化・スポーツ活動と評価について

桑原 清

#### 一 はじめに

本分科会における報告は、全体で2本であった。①うたごえ活動、②文化活動における「お金と責任」、についてである。二〇一一年度の分科会は、昨年度と同じく文化活動に限られての報告であったが、スポーツをおこなっている人の参加があったため、文化・スポーツ活動に共通する問題を深めることができた分科会となった。今回の分科会での共通テーマということであれば、「活動における個性と連帯性」ということであろうか。

今年の2本の報告は、この二、三年の本分科会の討議の成果を踏まえ、またはそれを発展させるものであった。①うたごえ活動では、個人の歌うという要求が前提としてあるものの、ただ歌うことを楽しむということにとどまらないものを「うたごえ運動」の参加者がもっているというこ

とが特徴的なこととして指摘された。②文化活動における「お金と責任」では、演技者としてのプロ（それで生計を営んでいる）でもある人たちのマネージメント組織としての「事務所」（そこから給料が出ているわけではない）および事務局長が果たした役割の総括から、お金が出ないボランティアといくらかでも金銭的な対価を受け取ることができるという体制は、責任を果たすということで「差」を生起させるのではないかという体験に基づく強烈な問題提起であった。このことも個人と連帯、文化における「お金」の役割をめぐるこの間の討議の延長として位置づくと思われる。

これら2報告が提起していることは、①文化活動の担い手とそれを維持していく個人的モメント、②文化活動を担っていく場合の各人の責任の所在、③文化活動とお金の問題、と捉えることができる。

## 二 各実践報告の概要

### 1 北海道のうたごえ運動とうたごえ祭典と歴史・成果・課題

北海道合唱団 増子 捷二

#### (1) うたごえ運動の歴史から

戦後の文化運動（特に音楽）の高揚は、突然起った訳ではなく、戦前からの文化運動の伝統、様々な外国の文化（特に映画、音楽等）の輸入、帰還者が持ち帰ったものが全国の地域、炭鉱等での公演されたこと、文化運動の組織化の提唱と青年共産同盟の活動等の様々な要因がある。戦後、地域でいち早く文化運動の中心となったのは炭鉱であった。映画館や娯楽施設が作られ、一流の音楽家・芸術家、演劇等が来場し、毎日のように映画が上映されていた。又、炭鉱の組合を中心に多くのサークルが作られ、横のつながりも活発であった。一九四八年二月、関鑑子氏の提唱により「青共中央合唱団」が創立され、日本におけるうたごえ運動が始まった。以後、うたごえ運動は全国組織として各地に中心合唱団が作ら

れ、「うたごえは平和の力」のスローガンのもとに運動が進められてきた。日本における大きな民主的運動として、「原水爆禁止運動」、「母親運動」、「うたごえ運動」が世界にも知られるようになった。

うたごえ運動の発展は以下のように時期区分することができる。①創成期：中央合唱団の創立（一九四八年）、全国での「中心合唱団」の誕生と大きな広がり。②一九六〇年代：職場の闘い、原水禁運動、基地闘争と沖繩返還闘争、安保闘争と三井・三池の闘い、歌劇「沖繩」上映運動。③一九七〇年代：「大衆化・現代化」の飛躍的前進の提起／ベトナムの勝利、革新自治体の誕生、運動内からの多数の作品、生活と闘いの歌の誕生と普及。④一九八〇年代：反核・平和運動の草の根運動や「反核日本の音楽家たち」との連携、「日本のうたごえ祭典」の全国開催、暮らし・いのち・平和を守る運動を励ますうたごえ。

#### (2) 北海道合唱団の誕生とうたごえ祭典

このような全国的なうたごえ運動の高まりの中で、一九四八年八月、札幌で「青共北海道合唱団」が結成され、創立以来、「うたごえは平和の力」を合言葉にして、北海道の（ある意味では日本の）うたごえ運動の先頭に立ち、平和と命、暮らしを守る闘いを支援し、国民の希望、

願いを歌に託して活動を続けてきた。初期の基地反対闘争、日鋼室蘭や王子製紙の闘いを始めとして、様々な運動の先頭に立ち、歌で闘いを励ましてきた。また、国内だけではなく、世界青年学生平和友好祭（ウルシヤワ、モスクワ、ウイーン、ヘルシンキ、ソフィア、ベルリン等）への参加、中国、ソビエト、インドネシア、ペトナム等を訪問して音楽の交流を行うなど、国際連帯運動にも積極的に参加してきた。返還前の沖縄への11次にわたるうたごえ代表団派遣は、沖縄の本土復帰への大きな力となり、それが歌劇「沖縄」の二次にわたる全国公演として結実した。

北海道のうたごえ祭典は一九五五年に開催され、以後毎年開かれている。この祭典は普段歌声運動に関わっていない多くの人々が参加する文字どおりの地域の祭典になっている。北海道の場合は札幌で開催されていたが、一九九〇年から道内の主要都市を回って開催されている。昨年（二〇一〇年）から三巡目に入っている。単に場所が変わっただけではなく、困難な条件もありながら、開催地がその地域性を生かした内容を重視し、多くの組曲を生み、民謡を掘り起こし、地元の他団体へも働きかけ、文字通り「地域に根ざした祭典」として企画され、大きな成功を収めてきた。

### (3) 現状の課題と今後の展望

うたごえも、個人の趣味や思いつきではなく、「運動」として続いているし、今後も継続・発展していくことが求められている。そのためには何が必要か。基本的には次の3点であろう。

①共通の理念・理論や絶え間ない運動の総括と方針、  
②運動を進める媒体（運動の進め手）、③それを支えてくれる人々、社会的基盤。

うたごえ運動はそれ自体が独立してあるのではなく、その時々々の社会状況を最も敏感に反応するものでもあり、うたごえ運動を広げていくためにはこれまでもまして常に社会状況の変化を敏感に感じ取る姿勢と音楽的力量の一層の前進が求められている。

## 2 「お金と責任」

東家夢助事務所 講談担当 荒井 到

### (1) はじめに

労働者曰く「給与は労働の対価である」。雇用者曰く「給与の分は働け」。いずれも正論で、つまりは「正當な労働に正當な賃金」を払うことが大切だと双方共に認めているわけである。そして働らく（働かせる）以上、

労働した(させた)責任も付いて回るとは言うまでもない。では「ボランティア」はどうか。お金とは無縁の奉仕活動であるから、リーダーと個人の間に雇用・労働の関係はない。となると活動する(させる)責任は：？金銭的契約の無い活動の場合、そのあたりの責任の所在が極めて不明確になる。東家夢助事務所はボランティア団体ではない。しかし給料は払われていないからメンバーの善意によって成り立っていることは間違いない。さてメンバーにはどのような責任があるのか。それとも一切責任はないのか。1事務所の小さな問題ではあるのだが、実はこの問題の本質は大変深いところにあるようにも思える。例えば東日本大震災のボランティアを受け持つ団体等は一体どのような責任を誰が負担するのか。この判断を一つ誤れば人命に関わることもあるだろう。「お金と責任」は経済社会に生きる者にとってはどうしても避けられないテーマである。

(2) 東家夢助事務所と運営をめぐる

東家夢助事務所とは、函館在住の嘶家東家夢助とその一門のマネージメントをする団体であり、構成員は夢助とその弟子、それに裏方の人という全員無給の集団である。芸人は多少収入にもなるが、裏方は全くの手弁当の参加となる。問題はこの裏方の責任である。

初代・二代目の事務局長は主婦の方で、良く夢助を知っている人。三代目は素人フォークシンガルの男性で、音響や会場作り、会計など、何をやっても安心して任せられるという人だった。それが数年前突然病に倒れた。それで四代目の事務局長の就任となるのだが：。三代目までは少ないながら給料が支払われてきた。ところがこの頃財政の悪化があつて、四代目からはそれが無くなつた。つまりボランティアである。この四代目、合唱・映画鑑賞協会・勤医協友の会の世話人等、とにかく他に役職をたくさん持つっていて、必ずしも十分な働きができたとは思えなかつた。そこで二〇〇七年A氏がその上の所長に就任、自らは渉外四代目には事務局長として内業と考えたのだが、これがうまくいかずその後事務局長は空席となつている。

A氏の運営は一言で言うところあまり前例にとらわれないということであつた。例えばイベントの回数はそれまで、年1回の落語大学。それに2年に1回中央の嘶家を呼ぶくらいのものであつたが、A氏が所長になつてから1年に1回か2回呼んで来る。スタツフは忙しくなり、チケツトの販売も大変になる。また会議の資料も独自の用語を使つていたりして、丁度会議の日A氏に急用ができたため他の委員だけで会議を行うことになつたのだが、何

が書いてあるのかわからず流会、などということもあった。仕事を取ってきたり作ったりする能力に長けていて、新しい落語会の仕事を引き受けるのだが、あるときなどその出演者にうまく伝わらず演者は会場にポスターが飾られているのを見て初めてそれを知るということもあった。そのようなことが積み重なり、次第に「A氏が何か言うともんなソツポを向く」という状態になってくる。そして辞任。

仕事の依頼に応える・営業をするというのは夢助1人でも可能だが、全国落語大学や函館に芸人を呼ぶようなイベントの場合は組織で動かなくてはならない。その「組織する」という点に関しては、夢助1人の力では限界があった。そこで後援会(東家夢助さんを後援する会)会長が実質的に夢助事務所の事務局長のような役回りをするようになる。二代目の後援会会長は熱心なクリスチャン(カトリック信者)で、そのせいか奉仕の精神に富んでいる。報告者は夢助の弟子でもあり、講談を仕事と思っているから「これも自分のため」と、ある程度は割り切れるのだが、全ての人がそうではない。事実、二〇一一年落語大学の第一回委員会の出席者はわずか5名。第二回は6名だった。打ち合わせ参加者が充分でなければ欠席者への了解を取り付けるといふ余計な作業が増え

る。また当日の手筈の狂うことも。それでも文句は言えない。彼ら・彼女らは打ち合わせには来なくても、とにかく「手伝ってください」のだから。このあたりが日給5千円で舞台設営のアルバイトを雇う函館音楽鑑賞協会と立場の違うところである。A氏にしても打ち合わせ不参加の委員にしても、賃金的なものが少しあつたら、事務所経営・後援会経営・そしてイベント運営により熱心に取り組んだのではないかと考える。

### 三 報告・討議から学んだこと

#### 1 文化活動は社会的なものと連帯した時に発展する

北海道合唱団の活動、うたごえ運動はまさに合唱団の誕生そのものが、社会状況・社会運動と密接に関わっていたことが、その歴史からうかがえる。うたごえ運動に関わってきた人たちの意識の中には、自分だけで歌うことを楽しむことができれば満足するというものではなく、歌うことによつて、自分の意思や考えを表現する、もしくは表現せざるを得ないというレベルでうたごえを理解しているように思える。またそれは釧路祭典の際の

矢白別演習場における人々との横のつながり、連帯の大切さを実感したことにあらわれている。地域の民謡の掘り起こしや作業歌などの発掘も行っているが、楽譜などが無いこともあり、そう簡単な作業ではないといえる。また、個人から始まるということは芸術活動でもそうである。技量の問題があり、下手だと誰も聞いてくれないので、ただ単に「闘い」を言っただけではだめであるということが討議で出されたこともある。ここでは、個人的な興味・関心から始まり、それが社会的な問題とどのように連帯していくか、そのことにより技量の向上と人間的な成長を望んでいる人々が確実にいるということを確認する必要があるだろう。

## 2 活動における個人性と連帯性をめぐって

文化関係以外の分野でも個と集団の関係をめぐる問題は、当該活動の中核的なものとなっている。討議では、文化活動というものはもともと個から出発したが、集団のものとなっていったこと、成功したかどうかという場合は、数量化してしまいがちになり、そこを注意しないと文化の発展は望めないということがまず提起された。この数年の討議との関連で言えば「市場原理」と文

化活動とは相容れないのではないかという問題である。

スポーツ関係の参加者の方の指摘が印象的であった。和太鼓を5歳から21歳の現在まで行っているが、十勝芸能フェスティバルとして東京大会に参加するのに統一がとれないことがあった。また、陸上競技を行っているが競技によって、共同性に差がある。つまり、100メートル走の場合は一発勝負であるが、投擲、跳躍種目の場合はちがうように思える。投擲、跳躍種目の場合、横のつながりがとりやすいのではないかと感じている。つまり、投擲を行っているアスリートである参加者が、相対的に選手同士がアドバイスや合同練習を行うことが多いことから、協力・連帯の可能性の大きさについて指摘したのである。

文化活動における市場原理の問題については、文化活動における「成功」「失敗」ということは、多くの場合、数量的なものによって判断されやすいが、文化というのはそうした数量的なもの、遠い位置にあるのではないだろうかという指摘も行われた。文化においては、そうした数量的な評価が必要なのではなく、当該活動を続けるということに意味があるということと理解される。

### 3 責任ということについて

この問題については、荒井さんの報告が分科会の緊張を高めてくれたように思える。分科会での討議が活発に行われたというわけではないが、参加者各人が自分の持ち場で感じている不合理なことについて代弁してくれていると受け止めたように思える。

ボランティアの問題についていえば、額の多少はともあれ有償ということも広がっている。交通費実費程度の支給というところもあれば、それさえも支給されないという場合もある。分科会の参加者の意見にもあつたが、何としても自分がやりたいということであれば、お金を払ってでも参加・活動するということもある。お金のことは無視することはできないが、活動を維持、発展させるためには、活動団体の人材育成機能、力量が今こそ求められているのではないだろうか。お金を出すか出さないか、または金額どのくらいにするかという問題は、当該団体の自主性・自立性の問題に委ねられていると思う。

荒井さんがここで提起されたことは、お金の問題ではないと考える。現代において、個人主義、消費主義、市場原理が我々の生活に深部にまで突き刺さっていること、半面、協力共同、共感、連帯の喪失状況に警鐘を鳴

らしていると受け止めるべきと思える。

### 四 今後の課題

報告レポートと参加者が極度に少なくなっていることもあり、分科会の存続についても参加者から意見が出た。事務局ともその後打ち合わせを行ったが、以下のような

ことを確認して次年度に臨むこととなった。

①パンフレットを作る際に、学校活動ということがよく伝わるような、表現にする。学校行事、特別活動、具体的には、運動会、学芸発表会、クラブ活動等の実践を掘り起こす必要がある。

②学校とは独立した文化・スポーツ活動も引き続きレポートを求める。今までは、地域における山登り等のレポートがあり地域として文化・スポーツ活動が位置づいていた。本分科会での荒井さんの講談を中心としたレポートは地域の人びとや中小企業との関係、その中での人づくり機能を内容として提起してくれている。

広くみれば教育が扱う領域ということが出来る。

③学校活動とも関連するが、読書・図書館活動を大きな柱の一つとして位置づけるようにする。「北海道子ども本の集い」等は数百人から1千人規模の人たちが

参加している。その他、各地域では読み聞かせサークル、ストーリーテリング、大型紙芝居、ペープサートを含め、教育研究集会とは「無縁」の人たちが活動を行っている。教育や子育てと大きく関係しているこれらの活動から学ぶ必要が今こそ求められていると思う。

④事務局として、レポートの発掘に相応の努力をする。事務局の地域連絡網を活かしてレポート・参加者を募ることに分科会として幾分かの期待を持っている。

（北海道教育大学札幌校）